2004（平成16年）12月26日（日曜日）（1）
VOL.08
●新聞 ●月刊誌発行 ●情報センター ●広報エリア 岩見沢市・三笠市・美唄市・浦臼
発行元：幾春別川ニュース編集委員会
編集委員長　嵯峨　義輝
〒068-0007
岩見沢市7条9丁目　石狩川流域総合開発期成会内幾春別川事務局内編集委員会事務局
TEL：0126-23-9555　FAX：0126-25-1697

大好き！幾春別川
DAISUKII IKUSYUNBETSU RIVER

「花びらはどんな形をしているのかな？」「いい香りがするね」

いろんな発見があったヨ～！

「ぼくたちも調べたよ」
北村で旧美唄川の河川調査

「カニさん、ちょっと待いよ！」

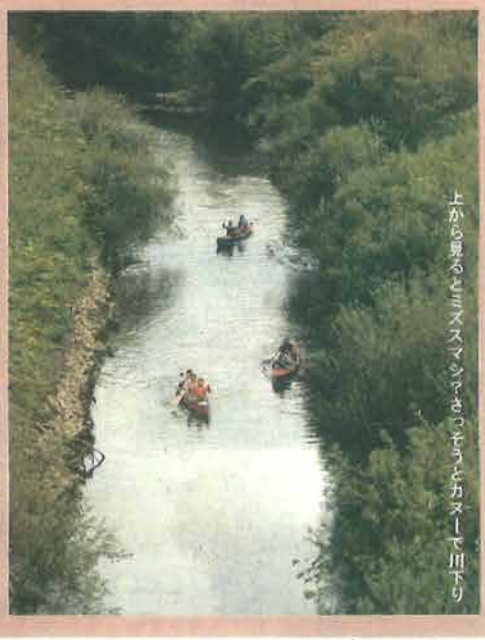
平成16年9月10日、北村の旧美唄川河川敷「水辺の楽校」で“五感で川を感じよう体験調査”をテーマに、「第3回　川をはかる・川を見る・川を知る河川調査講習会」が行われました。川は危険だという意識を持っていた北村の子どもたちに、川を五感で知ってもらおうと、地元のNPO法人や団体、河川管理者などが平成14年から行ってきました。

今回は北村の保育園児も初めて参加。モクズガニの観察や、単むらで虫めがねを使っての虫探しに挑戦！一般参加者は、普段は出来ない流速の調査、水質調査、投網などによる水生生物の調査を。また、河川敷では水質浄化に役立つ水に強い植物エゾミゾハギの植樹を行いました。昼食のあと、午後からの河相調査では、参加者全員がカヌーで赤川排水機場までの約4kmを下りました。普段は見ることが出来ない川岸の様子や野鳥などの観察を行いました。途中雨に合いずぶぬれになりましたが、約1時間半におよぶ川下りを体験しました。

エゾミゾハギ

カミネッコンを使って
エゾミゾハギの植樹

「えいっ！」投網に挑戦


上から見るとミズスマシ？さっそうとカヌーで川下り

連載③
流域の野鳥　冬

白いハンター「シロハヤブサ」

吐く息も凍る冬の朝、一部を除いて雪と氷に覆われている幾春別川。スキーで、息を切らしながら歩く、シーンと静まりかえった白銀の世界。

スキー板に腰を下ろし、遠くの樽前山を見ながら温かいコーヒーを飲み静かさを楽しんでいると、突然ただましくスノーモービルの爆音。堤防上から川ギリギリまでをジグザクに走り抜けていく。その直後、後ろから白い隠がもの凄いスピードで、わずかに空いている川の流れに飛んでいった。バタバタバタと強い羽音とカモ達の悲鳴とも思える鳴き声。一瞬の隙に、1羽のコガモを捕らえ遠くへ飛んでいった。スノーモービルの音に驚いてカモの群れが飛んだ一瞬の隙を狙った、弱肉強食の厳しさをみた。冬にわずか北海道に飛来するシロハヤブサは、ハヤブサの中でも一番大きい狩りの名人。早いときで時速300㎞に近いスピードで獲物を捕らえると言われている。

何もないと思っていた、白い河川敷の世界。わずかに空いた流れの中でエサを求める生き物。また、エサを求めて河畔林で休む生き物。厳しい冬を過ごすための自然界の掟を見た。そして、すごいスピードで遠ざかっていく雪煙をみた。

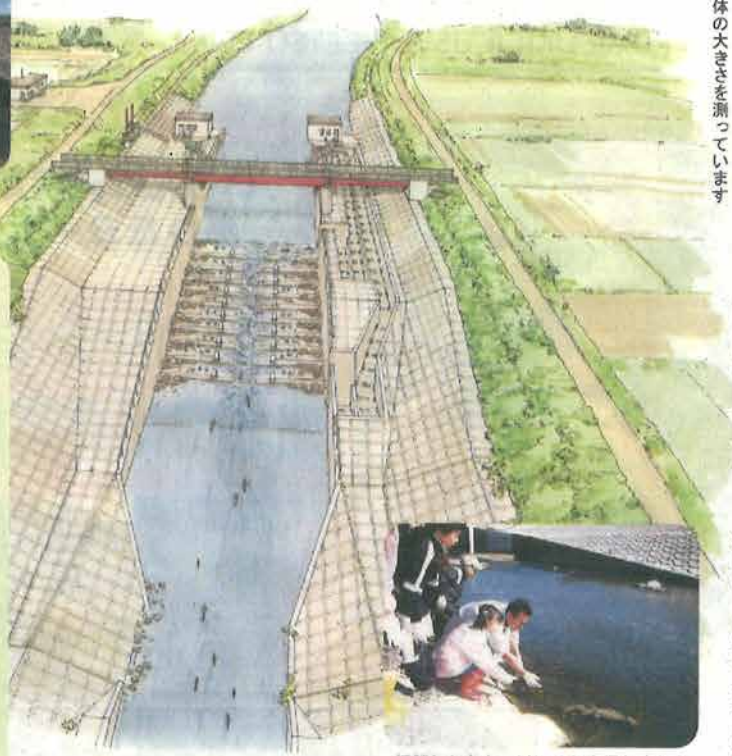
（岩見沢野鳥の会　若林信男）

お帰りなさい！幾春別川に…幾春別川サケ特別採捕

サケの体の大きさを測っています

サケの成育具合を観察する特別採捕が10月15日、秋晴れのもと、川向頭首工で行われました。「幾春別川をよくする市民の会」が平成8年より毎年行ってきている特別採捕は、13年から地元の小学生も参加。今年は志文小学校の2年生65人がサケの重さや、大きさ、年齢などを調べるための採鱗などを行いました。

帰ってきたサケの成育をみんなで観察しています



採鱗したあと、川にサケを帰しました

参加した児童は、浜益村から毎年採捕に協力いただいている漁師さん方による引き網や投網などを見学した後、分担したそれぞれの役目の中で、初めて生きたサケに触れ、驚き、感激しながら、サケと格闘していました。

今年は川向頭首工の魚道も完成し、頭首工より上流でもサケが確認されました。これからもサケたちは、ふるさとの幾春別川を上流へ上流へと上っていくことでしょう。

4年魚のウロコ

写真提供
教育大学岩見沢校　木村賢一教授

サケの歳は、採取したウロコ(鱗)から分かります。

ウロコには木の年輪に似た隆起線という線があり、冬には冬期線といってその密度が濃くなる部分があるので、その数を調べると年令が分かるのです。平成8年からの調査では、幾春別川にそ上するサケのほとんどは3～4年魚です。

子どもたちの感想

★「サケって噛むの？」
★「ウロコをとるのは難しかった。」
★「冷たかった」
★「初めてだけど、とても重たかった」

★「川に離したら、少し動かなかった」
★「元気で戻ってきてくれてよかった」
などの感想がありました！

こんにちはサケの赤ちゃん♪

～サケの発眼卵の引渡し～

来春、幾春別川で放流されるサケの発眼卵引渡しが12月7日に行われました。

引渡しは、恵庭市にある北海道立水産孵化場で行われ、石狩川水系の流域で社会教育用として育て放流するため、受精から20日ほどたち発眼したサケの卵6万粒が流域の各団体の代表に引き渡されました。このうち幾春別川流域では、岩見沢市の団体分が1万8，000粒、三笠市教育委員会分が2，800粒で、それぞれの代表が受け取りました。

岩見沢市の団体が受け取った発眼卵は、同じ日の夕方から市役所の会議室で、稚魚まで大切に育ててくれる保育園や各学校、企業など69団体の方々に100～500粒ごと袋に小分けされ引き渡されました。引き取られた卵は、みんなの愛情と努力により、元気なサケの稚魚に育っていくことでしょう。

感動！驚き！楽しみ満喫！川のイベント紹介

二市一村で緑の回廊づくり事業を実施

【三笠市】

10月21日（木）午後3時から三笠の湖・川・緑を愛する会主催により、萱野橋上流右岸で市内の小中学生など約60名が参加し、トドマツや実の成る木など170本の植樹が行われました。また、同日植樹に先立ち市内8ヵ所で「幾春別川クリーン作戦」も行われ、多くの市民が幾春別川の清掃に参加しました。

【岩見沢市】

10月28日（水）午後3時から幾春別川をよくする市民の会主催により、市民50人が参加し、狩野橋下流左岸100mの間でハマナス100本の植樹やツツジの冬囲いが行われました。

【北村】

三笠市「花による地域づくり事業」実施

三笠市では、7月下旬から8月上旬にかけて、まち全体を花によってイメージアップをする“花による地域づくり事業”の植花が行われました。植花は幾春別川河川敷のパークゴルフ場を始め、市内9ヵ所で多くの市民が参加し、自分たちの手で花壇づくりなどを行い、花による地域づくりに取り組んでいました。

11月6日（土）午前10時から幌途布の水天宮周辺で北村役場の主催で各種団体や村民約56名により、ドウダンツツジ120本の植樹が行われました。

幾春別川ふるさとの川づくり懇談会開催

昨年に引き続き11月24日、岩見沢コミュニティープラザで「幾春別川ふるさとの川づくり懇談会」が開催されました。この懇談会は、幾春別川のあるべき姿や川づくりの方針について議論を行い、今後いくつかの川づくりに生かしていくもので、今回も活発な意見交換が行われました。

連載

化石の宝庫 幾春別川 ③

すばらしい化石はノジュール中にあり！

桂沢湖周辺の幾春別川の河原を歩いていると、しばしば薄茶色をした丸い岩を見かけます。この固い岩をハンマーで力いっぱい叩くと、割れた岩の中からアンモナイトの化石が顔を出すことがあります。何度経験していても、岩の間から美しいらせん形をした化石が突然現れた時には、毎回軽い驚きとともに興奮を感じます。

北海道のアンモナイトは量も多く、保存がよいことで有名です。道外でもアンモナイト産地は少なくありませんが、産出量、保存の良さといった点で比較になりません。また世界中の化石研究者からも、その保存の良さは注目されています。

なぜ、北海道のアンモナイトは保存が良いのでしょうか？最大の理由はアンモナイトがノジュールという炭酸カルシウムに富む岩に覆われているからです。ノジュールを含む地層そのものは泥岩とよばれるもろい岩石なのですが、ノジュールはたいへん固く、化石を保護するケースの役割を果たしています。アンモナイトはノジュールのおかげで、地圧につぶされたり、地下水などによって風化を受けることから保護されるのです。国内他産地では化石の周囲にノジュールが形成されることが少なく、化石の多くは直接地層に含まれています。そのため、平らにつぶれたり、ぼろぼろになっていることが多いのです。ノジュール中に良い化石が含まれているのは、世界共通の現象です。外国の化石産地に行っても、化石採集イコールノジュール探し、ということはよくあります。

ノジュールは、海底にすむバクテリアの働きが大きく作用して形成されると言われています。当時の北海道付近はノジュールができやすい海底環境にあったのでしょう。

（三笠市立博物館　研究員　桒原賢一）

アンモナイトの不思議

アンモナイトを含むノジュール（夕張産）。アンモナイトの一部が見えている

地層中に含まれているノジュール（幾春別川支流）

アンモナイトを含むノジュール（ホバール産）

知ってる？ 教えて、川の先生！

Dr.リバーの何でも調査室

「川の水の量（流量）の測り方」

川を流れる水の量は、雨が降った後や春の雪解け、田植えの時期や川の形状などでも違います。その水の量を測るために、流れる水を何かで受け止めて計ることは出来ません。ではどのようにして計るのでしょうか？

水の量（流量Q）の測りかたは、水の流れる断面積（A）とそこを流れる平均的な速さ（V）を測り、それを掛けることによって（A×V）、1秒間にどれくらいの水の量が通過していくのかを、㎥/秒の単位で表します。しかし、水の流れる断面や速さは一時的なため、流れの量を連続して測ることはできません。

（例）断面積3㎡の所を流速2m/秒の水が流れている時の流量は、3㎡×2m/秒＝6㎥/秒となります。

川と わたしの思い出 2－①

「幾春別川を故郷に」

三笠の湖・川・緑を愛する会　事務局長　高橋　嘉徳

幾春別に住む古老が「昔は幾春別川にもサケが上がってきた」という話をしている。『昔』とはいつ頃のことか分からないが、ありそうなことである。

平成4年、幾春別川にサケの遡上を復活させようと、小中学校が中心になって稚魚の放流が行われ始めた。しかし、心配されることがあった。それは、果たして、産卵やふ化に適した条件が、幾春別川にあるのかということだった。

1、2年後にはサケが帰ってくるという平成6年9月、三笠市は『幾春別川湧水地調査打ち合わせ会議』を召集し、可能性を探ることになった。この調査に私も参加した。

会議は、具体的な調査方法や調査日程を打ち合わせることがメインであった。しかし、その前にサケやマスの産卵やふ化に適した条件を学ぶことが先となり『水産庁北海道さけ・ますふ化場』から出されている資料の学習から始められた。

サケとマスの行動の違いを中心に、産卵場の流速、産卵床内の水温、産卵床の砂利組成、産卵床の大きさなどを多岐にわたって学んだ。

その結果、サケの産卵場にはクルミ大の砂利と『湧水』が必要なこと、マスの産卵場にはサケと違い、クルミの2倍の大きさの砂利でも良く、滲透水（しんとうすい）があれば良い事が分かった。

この学習で調査の具体的な方針が決まった。湧水は、断層や地層の亀裂を捜すこと。滲透水（しんとうすい）は、基盤岩とその上に堆積している砂利のある場所を捜すこととした。

（つづく）

幾春別川に帰ってきたサケ　H14

わがまちの

名人

熊狩りの名人

原田　繁男さん
68歳　三笠市

「やはり血筋かな？親父がマタギだったんです。でもその親父に『ヒグマだけには手を出してはいけないぞ！』と言われました」と語る三笠市猟友会の原田さん。ハンター歴48年の熊狩り名人にお話をお聞きしました。

―ハンターになったきっかけは、また幾つころでしたか？

幌内の本沢で生まれ育ち、16歳で空気銃でしたがスズメなどを撃ちました。自分で言うのもおかしいですが百発百中でしたね。誰に教わったわけでもないですよ。父親が秋田でマタギをやっていましたから、やはり血筋ではないかと思います。猟欲とでも言うのが、それが狩猟を始めたきっかけなのかな。

―最初にヒグマと対峙した時のお気持ちはいかがでしたか？

20歳になり猟銃を親に内緒で買い、最初は鳥やノウサギなどを獲っていましたが、ある日、父親に「おまえたち、銃を買っていないか、自分もやってきたから分かるが決してヒグマだけには手を出すな」と念を押されました。しかし28歳のとき、傷を負ったヒグマが市の沢に逃げたと猟友会に連絡があり駆除に出かけたら、最初に遭遇し、立ち上がってくるところを撃ちました。狙って撃つというものでなく本当に一瞬で、それは350㎏の大きなヒグマでした。

―熊狩り、今は有害鳥獣駆除ですが、方法や頭数、また危険と感じたことなどは？

当時この周辺はヒグマが多く生息していました。昭和39年から10数年間にわたり、桂沢ダム管理所でヒグマのハンターとして非常勤で勤めていました。測量や調査、工事などで山に入るときは銃を持ち、職員などを守る仕事でした。また熊狩りは、山や沢の位置、方向などの地形を熟知し、ハウス（巣穴）の場所や行動の習性を学ぶことが大切です。グループで駆除を行うわけですが、獲った頭数は48年間で119頭です。

危険と感じたことは3度ほどありました。一番肝を冷やしたのは死んだと思っていたヒグマが向かってきたときです。その時は棒で倒しました。

―最近熊の出没の話が多く聞かれますが。

幾春別川の上流などはヒグマのテリトリーです。熊が出没するのでなく熊のテリトリーにわたしたちが侵入しているのです。熊は人を襲わないと思いますが、熊と出会いそうなところへは行かないことが一番です。もし出合ってしまったら、気付かないふりをするのが良いのではないでしょうか。

最後に名人は、「長年ヒグマを追い続けていくなかで、学んだことがたくさんあります。私にとっては動物が狩りの師匠です。そういうことを伝えていくことも大切なことかなと最近は思います」と教えてくれました。

連載

幾春別川と渡船 ②

当時の幾春別川は現在とは流れが異なり、幌向川に合流して石狩川に注いでいました。

その幌向川と幾春別川では、3ヵ所で渡船が行われており、一番下流の幌向太の渡船場は、明治12年、幌内媒田開採史料を基にした調査によると、石狩川との合流点から約1㌔㍍手前に幌在住で、当時岩見沢に出稼ぎしていた狩野末治が札幌県令に「空知郡郁春別川渡船場設置の儀」を出願し、これが受理され、元町に渡船場が開かれています。出願書の中には渡し賃として「大人一人三銭、小児一人壱銭、六歳以下ハ無賃」と記されていました。

あり、大正の中頃まで続いていたと言われています。明治15年9月8日付けの資料に「幌向太渡船場修繕ノ儀出願の件」があり、その建設費用として29円65銭の出費を求めている記載があります。

幾春別川中流部での渡船場としては、明治18年1月6日、札

明治20年、山口・鳥取からの士族移住者が入地したことを受けて、現在の岡山橋付近にも渡船場設置の必要性が高まりました。そこで、札幌の住人であった鈴木元右衛門が8月25日に「御願書」を提出し、渡船場経営許可を受けて、丸木舟での運行を始めました。渡し賃は一人2銭でした。

狩野・岡山、これらの渡し舟は明治24年に岡山橋、明治26年に狩野橋が架けられるまでの間、開拓期の交通手段として地域の歩みに大きな役割を担いました。

参考文献
「岩見澤市史」
「岩見澤１００年史」
「東　郷土誌」「北本町記念誌」

狩野末治の渡場が記されている岩見沢発祥の碑

水辺の風景

岩見沢市　今井　俊次さんの作品「遠景は芦別岳」
「幾春別川の源流を探して、仲間と上二股沢を登った時の頂上からの1枚です」

写真募集

あなたの好きな水辺の風景を写してみませんか。

応募内容

●プリント、デジタルデータ、ポジフィルムなど、形態は自由。あなたの「想い」など、お送りいただく写真の風景についてのコメントを原稿用紙などに100文字以内にまとめて、写真と一緒にお送りください。順番に「大好き！幾春別川」に掲載させていただきます。
※1人何点でも応募可。
※写真の返却はいたしません。
※応募は随時受付
●送付先：下記連絡先
「大好き！幾春別川　水辺の風景係」まで

お便りお待ちしております！

本紙は、楽しい誌面をつくるために読者みなさまからのご意見やご感想をお聞きしております。また、「○○についてぜひ取り上げてほしい！」という話題もお待ちしております。どしどしお寄せください。

【連絡先】
石狩川開発建設部 岩見沢河川事務所内
幾春別川ニュース編集委員会 事務局
〒068-0007　岩見沢市7条9丁目
※ご質問の内容は、郵送か、ファックス（0126・25・1697）にお願いいたします。

お願い！！

ゴミを捨てないで！

毎年、市民団体を中心とした地元住民の方々に、幾春別川の河川清掃を行ってもらっています。

しかし、残念なことに、この写真のようにゴミが捨てられています。

本来、河川敷は自然豊かで、みなさんの憩いの場でもあります。

河川（敷）にゴミを捨てないで！

行事予定

旧美唄川雪中植林
☆開催日：2月中旬予定
☆場　所：北村旧美唄川河川敷地
☆主　催：NPO山のない北村の輝き

昨年は子供たちも参加しました